●作品タイトル

My Angel

●ペンネーム

甲斐てつろう

【あらすじ】

逃げて、向き合って、そして始まる。

一見成功者に見える立ち振る舞いをする青年、岬丈二。

しかし彼は母や周囲の人々の期待に応えようと頑張り、とうとう潰れてしまった。

そんな彼は何度も「頑張れ」と詰められた結果、幼馴染である直樹のスポーツカーを盗み現実逃避の旅に出る。

そこで家庭に居場所を失った家出少女・渚麗奈と出会う。

彼女の強い希望によって、二人は逃避行を共にすることになる。

しかし、その旅は思わぬ事態へと発展する。

麗奈は未成年であったため誘拐事件として大々的に報道され、現実がどこまでも迫ってくる。

麗奈を守ろうとする一方で、彼女からも拒絶されることを恐れ、再び自分を追い詰めていく丈二。

母や周囲から拒絶され、また失敗を重ねてしまうが、彼女から伝えられた言葉は「よく頑張ったね」。

そこで丈二は気付く。

認めて欲しかったのは成功する自分ではなく、頑張ってきた過程だった事に。

しかし時すでに遅し。

自分の本心や認めてもらう温かさに気付いた頃には、その過程で犯してきた過ちへの報いがすぐそこまで迫っていた。

追い詰められた丈二は麗奈を守ろうとして立てこもり事件を起こすが、彼女の意思まで奪っていたことに気づき、投降を決意する。二人は離れ離れになるものの、互いから得た肯定を胸に、それぞれの過ちや現実と向き合い、人生をやり直そうとする。

【登場人物】

岬丈二(25)　嘘まみれのフリーター

渚麗奈(16)　家出した女子高生

船場直樹(26)　アパートの大家

岬由希(55)　丈二の母

刑事 A(43)　丈二を追う刑事

刑事 B(28)　丈二を追う刑事

麗奈父(52)　麗奈の父で医者

麗奈母(38)　麗奈の母

その他

【本編】

○アパート・丈二の部屋　（朝）

テーブルに置かれたスマホから留守電が鳴る。

岬由希（５５）の声が誰もいない部屋に響く。

以下、留守電

×　　×　　×

由希「もしもし丈二、お母さんだけど。もしかして忙しいからあんま連絡くれないのかな？だったら良い事だから気にしないで。せっかくいい企業に勤めてるんだから。お母さんも鼻が高いよ、沢山勉強頑張らせた甲斐があったなぁ。まだまだ頑張れば社長にだってなれたりして！」

×　　×　　×

岬丈二（２５）、シャワーから上がり留守電が流れている事に気付く。

以下、留守電続き

×　　×　　×

由希「でもたまには声が聞きたいな、時間がある時は連絡してね？　じゃあ今日もがんば……」

×　　×　　×

丈二、頑張れという言葉を遮るように留守電を止める。

丈二「はぁ……」

丈二、溜息を吐き身支度を始める。

ロックナンバーを流しながら髪を整え服を着てそのタイミングで焼けた食パンにジャムを塗ってコーヒーと共に口に運ぶ。

食後の一服をしながらスマホでメッセージを確認した。

以下、画面上で

×　　×　　×

後輩「丈二さんのお陰で企画通りそうで　す！」

丈二「そうか、頑張った甲斐があったな！」

×　　×　　×

丈二、時計を確認すると煙草の火を消して玄関に向かう。

香水を浴びて車のキーを手に玄関から外へ出る。

○アパート・駐車場　（朝）

丈二、停められたスポーツカーを優しく撫でた。

船場直樹（２６）、スポーツカーを撫でる丈二に声を掛ける

直樹「何してんだ」

丈二、直樹に話しかけられ態度が弱々しくなってしまう。

丈二「いや、カッコいい車だから……」

直樹「またレプリカで気分だけ味わおうってのか」

丈二「だってこんな良い車買えないし……」

直樹「いつまでもフリーターだからだろ、その割に服とかは良いの買ってさ」

　直樹、本物のキーで車の扉を開けエンジンを掛ける。

丈二「直樹も仕事？」

直樹「あぁ、不動産屋さんと話しにちょっ　と。誰かさんのせいで経営がな、早く家賃頼むぜ」

丈二「分かってるよ……」

直樹「もっと頑張って就職しろよ、カッコつけんのはそれからだ」

　直樹、車を走らせ仕事へ向かう。

　丈二、車を見つめながら溜息を吐いた。

○職場・コールセンター　（朝）

　丈二、誰とも会話せずにマニュアルだらけの席に座る。

　髪型が崩れないように気を付けインカムを身に着けた。

丈二「左様で御座います、こちらの回線に変えていただくとお値段が今より安くなるんですねっ……」

　マニュアルを見てセールスの電話を老人相手に行っている。

老人「……いらないです」

丈二「でしたらこちらの……」

老人「いらないっつってんだろダァホッ！」

　老人に怒鳴られ電話を切られてしまう。

上司、丈二に声を掛ける。

上司「またダメだったか」

丈二「はい……」

上司「もう半年も経つのにマニュアルに頼ってるからだぞ？　緊張も抜けてないから相手も安心できないんだ」

上司、丈二の肩を叩く。

上司「ホラ、午後からはもっと頑張れ」

×　　×　　×

午後になりアルバイトの高校生がやって来る。

上司「おぉ来たか、今日も頼むぞ」

バイト「任して下さいよ～」

丈二、２人のやりとりを羨ましそうに見ている。

×　　×　　×

バイト、業務を開始してすぐそのまま契約を取る。

バイト「はい、はい。左様で御座います。本当ですか、ありがとうございます！」

上司も高校生の様子を感心しながら見ている。

○同・コールセンター　（夜）

終業の時間になり一同は帰宅を始める。

上司、帰る直前の丈二に成績表を見せつけた。

上司「岬、結局お前がビリかよ」

丈二「すいません……」

上司「謝罪は何度も聞いたよ、どうするかって聞いてんの」

丈二「はい……」

上司「見た目も雰囲気も良いから出来るヤツかもと思って採用したけどよ、もっと中身を磨く努力をしろよ」

丈二「はいっ……」

上司「もっと時間短くしても良いんだぞ？　長時間勤務の割に成長見られないし正直こっちも困るんだ、給料だけ持ってくから」

丈二「はい……」

上司「さっきからはいはいって、本当に分かってんのか？」

丈二「……はい」

上司「ったく……ホラ、もっと頑張って見た目と雰囲気に見合う男になれよ」

上司、丈二の肩を叩いた。

○同・階段の踊り場　（夜）

丈二、誰もいないのを確認して地団太を踏む。

丈二「だぁぁぁクソッ！」

しかし階段を昇ってきたOLに見られてしまいまるで転びそうになったかのように誤魔化した。

丈二「んんんんんん！」

丈二、OLが去ったのを確認し腕を噛み音を殺し叫ぶ。

○同・ビルの裏路地　（夜）

丈二、ビルの裏でしゃがみながら煙草を吸う。

その際、スマホで朝のメッセージアプリを確認していた。

以下、画面上で

×　　×　　×

後輩「丈二さんのお陰で企画通りそうで　す！」

丈二「そうか、頑張った甲斐があったな！」

×　　×　　×

丈二、そのフェイクメッセージアプリで後輩を演じた文章を打つ。

以下、画面上で

×　　×　　×

後輩「あなたは頑張ってますよ、どうか気を落とさないで」

×　　×　　×

丈二、煙草の火を消し帰路につく。

○アパート・部屋の前　（夜）

丈二、暗くなる頃に帰宅。

直樹、部屋の前で待っていた。

直樹「やっと帰ってきた」

丈二「待ってたの？」

直樹「うわ、お前また煙草めっちゃ吸った　な？」

丈二「それしか拠り所がないんだよ……」

直樹「はぁ、そんで話あるんだ。俺の部屋に来い」

丈二「俺の部屋じゃダメ？」

直樹「煙草臭いだろ、俺の部屋でも吸うな　よ」

丈二「あぁ……」

○同・直樹の部屋　（夜）

丈二と直樹、机で向かい合い座る。

直樹「何の話か分かるだろ？」

丈二「……家賃」

直樹「そうだな」

直樹、未払いの振り込み用紙を突き出す。

直樹「これで何度目だ？　事情があるのは分かるけどよ、こっちも払ってもらわないと干上がっちまうんだ」

丈二「もうちょっと待って！　必ず払うか　ら！」

直樹「それは何回も聞いた、もう信用ならねぇんだって」

丈二「くっ……」

直樹「お母さんのグループホーム、そっちはちゃんと払ってんだろ？」

丈二「そっちの費用が高くて……！」

直樹「だからって見過ごせないんだよ。幼馴染のよしみで見逃してやって来たけどよ、流石に限界だぞ」

丈二「でも……」

直樹「どうだ、そろそろお母さんに本当のこと話してみるのは？」

丈二「は……？」

直樹「俺も調べたんだけどさ。収入少ないなら、施設代の補助出るらしいぞ」

丈二「だ、ダメだ！　母さんは病んでるん　だ、本当の俺を知ったら……」

直樹「だからって今のままでいい訳ないだ　ろ！　本当のこと話せよ……」

丈二「……無理だって」

直樹「じゃあいつまであの嘘続けんだ？」

丈二「……母さん、それ信じて生きてんだよ」

直樹「じゃあお前は……？　このままでいいのか？」

丈二「……知らねぇ」

直樹「頼むからちゃんと考えてくれよ。俺だってもう庇えねぇぞ。次も払えないなら出てもらう事になる」

丈二「じゃあいいよ、出てく」

直樹「何でそうなる！」

丈二、無気力に立ち上がり玄関に向かう。

直樹、追いかける。

直樹「おい待て！　逃げてどうすんだよ！」

丈二、無視してブーツを履く。

直樹「このままじゃ本当に最悪になるって、一緒に頑張ろうよ！」

丈二、立ち上がり呟く。

丈二「頑張ったよ、散々。もう疲れた、休ませて……」

直樹「お前やばいぞ！　病院いこう、本当　に！」

丈二「そしたら母さんにバレるかもだろ……」

丈二、玄関に置いてあった車のキーを手に取る。

そのまま外へ出て直樹のスポーツカーへ向かう。

直樹「は？　何やってんだ！」

直樹、慌てて靴を履き追いかけるが丈二は既にエンジンをかけてしまっていた。

直樹「待てよ！」

直樹、走り出す車の窓を叩くが丈二は無視を決め込む。

丈二、そのまま直樹のスポーツカーを盗むような形で走って行った。

直樹「あのバカ野郎……！」

直樹、丈二が車で走り去っていった道を一人で眺めていた。

○コンビニ・駐車場　（夜）

丈二、コンビニの駐車場に車を停める。

そのまま降りて設置された灰皿の前で煙草に火を点けた。

丈二「ごほぉっ……」

丈二、勢いよく吸い込んだため咳き込んでしまう。

そのタイミングでガラの悪い男達がコンビニから出てきて丈二の隣で煙草を吸い始める。

丈二、怖くなりそそくさと車に戻り運転を再開した。

○ロックバー　（夜）

丈二、ロックバーで一服する。

マスター、丈二に声を掛ける。

マスター「今日は直樹は一緒じゃないんだ」

丈二「そうっすね……」

マスター「んじゃ何飲む？」

丈二「飲めないんです、運転するので」

マスター「お、遂に車買ったの？」

丈二「そんな感じっす……」

マスター「ねぇ、車見せてよ！」

丈二「え、それは……」

マスター「何渋ってんだよ。あ、直樹のスポーツカーで目が肥えてると思ってんのか？」

丈二「う……」

　そのタイミングで店のドアが開く。

マスター「いらっしゃいませ……ん？」

　丈二、安堵の溜息を吐く。

　しかしマスター、来客の様子に困惑した。

マスター「え、その恰好なに……？」

　渚麗奈（１６）、セーラー服にＧジャンだけを羽織り来店。

マスター「高校生なの、それともコスプレ？身分証見せてもらえるかな？」

麗奈「身分証、持ってないです……」

マスター「年齢が分からないとちょっと入れられないかなぁ」

麗奈「えー良いじゃないですか！　ホラこのクレカめっちゃいいやつ、私お金持ちだから！」

マスター「あのねぇ、こっちも営業してる身だからしっかりしなきゃいかんのよ。警察呼んで補導してもらう事になるけど？」

麗奈「警察はっ！　ウチには帰りたくな　い！」

　丈二、警察という言葉にビビり介入する。

丈二「あの、マスター！」

マスター「どうした、知り合い？」

丈二「えっとそういう訳じゃ……」

　丈二、必死に考える。

丈二「その子、俺が連れて帰ります……」

マスター「ＪＫをナンパかお前！　なら外行きな、ウチはそういった事に加担したくないんで」

丈二、麗奈を連れて店の外へ出る。

○ロックバー・外　（夜）

丈二、麗奈の隣でしゃがみ込み煙草を吸う。

麗奈「ねぇ、何で助けてくれたの？」

丈二「だからナンパだって……」

麗奈「ウソ、じゃあ何で話しかけもしない　訳？」

丈二「う……」

麗奈「お兄さん犯罪者なんだ？」

丈二「ごほっ、何で……？」

麗奈「だって警察って言われた途端に止めに来たし」

丈二「くっ……」

麗奈「ねぇ何やったの？」

丈二「何で嬉しそうなんだよ？」

麗奈「ロックな人好きなんだ！　自由って感じで」

丈二、溜息を吐く。

麗奈「ねぇねぇ教えて？」

丈二「ダチと口喧嘩になったから車盗んで逃げた」

麗奈「えーすご！　超ロックじゃん！」

丈二「そんなカッコいいもんじゃねぇぞ、俺なんかつまんねぇ男さ」

丈二、煙草の持ち方を変える。

麗奈、その仕草を気に入る。

麗奈「おぉその持ち方カッコいい！　うん、お兄さんはつまらない人じゃないよ！」

麗奈、丈二にお願いをする。

麗奈「そこでお願いがあるんだけど、今逃げてるんでしょ？　私も連れてって！」

丈二「はぁ？　何でそんな事！」

麗奈「実は家出してるんだ、行く所なく　て……お兄さんと一緒なら楽しめそう！」

丈二「いやでもなぁ……」

麗奈「許してくれなきゃ補導された時に警察に言うぞ」

丈二「はぁぁ分かった、着いて来い」

麗奈「やった！」

丈二と麗奈、盗んだ車を見る。

丈二「これが車」

麗奈「盗んだ車かぁ」

丈二「あんま言うな」

丈二、そそくさと車に乗り込む。

丈二「早く乗れ、置いてくぞ」

麗奈「あぁ待って」

麗奈、慌てて車に乗りシートベルトを締める。

麗奈「よーしレッツゴー！」

丈二、エンジンを入れて運転を始める。

丈二「そいえば名前は？」

麗奈「麗奈、渚麗奈！」

麗奈、ウインクをしてアピールする。

丈二、冷や汗を流しながら運転を続けた。

○ロックバー　（深夜）

マスターのスマホに直樹から着信が。

マスター「もしもし、どうした直樹？」

直樹「マスター、すいません遅くに」

マスター「営業中だから問題ないよ。てか大丈夫か、具合悪そうだけど」

直樹「色々ありましてちょっと聞きたいんですけど店に丈二来てません？」

マスター「あぁ、さっきまでいたよ」

直樹「え、マジですか？」

マスター「車買ったとか言ってたけど」

直樹「……その車、俺のです」

マスター「どういう事？」

直樹「盗まれたんですよ！」

マスター「えぇ！」

直樹「今警察と話してアイツが行きそうな場所探ってたんですよ、詳しい状況とか教えてくれません？」

マスター「わ、分かった……」

マスター、直樹に丈二の様子などを話した。

○車の中　（深夜）

丈二と麗奈、宿泊できるホテルやネットカフェを探すが泊まれない。

丈二「どうする、休まらねぇぞ……」

丈二、イライラが募り貧乏ゆすりしてしまう。

丈二「煙草吸いてぇ……」

麗奈「吸えばいいじゃん」

丈二「あのな、他人の車だぞ」

麗奈「そういうの気にするの？　それ以上の事もうやってるのに」

丈二、麗奈の要望に溜息を吐く。

麗奈「ねぇ見てみたい、運転しながら煙草持つ手を窓から出す奴！」

丈二「ったく分かったよ……」

丈二、言われた通り煙草を持つ手を窓から外に出す。

麗奈「それそれ！　映画みたいでカッコいい！」

丈二「映画好きなのか？」

麗奈「うん！　ってかサブカル系全般！」

丈二「だからそんな恰好……」

丈二、麗奈の服装を見る。

麗奈「あーこれね。学校から帰ってそのまま親と喧嘩したからね、着替える暇なかったの」

丈二「なるほどね」

丈二、少し気にする素振りを見せる。

丈二「喧嘩ってどんな……」

麗奈、そのタイミングで何かを発見する。

麗奈「あ、ホテルだって！」

そこにはアメリカのモーテルのような建物が。

○ラブホテル・外観（深夜）

丈二「ここって……」

麗奈「モーテルみたい！　駐車場空いてる　よ、泊まれるかも！」

丈二、苦笑いしながら車を停めた。

○同・部屋　（深夜）

丈二と麗奈、チェックインし部屋に入る。

丈二「ふぅ、何とか入れたな」

麗奈「わぁでっかいベッド！」

麗奈、いきなりベッドにダイブする。

丈二「はしゃぎすぎだぞ、ベッドでは靴脱　げ」

麗奈「はーい」

麗奈、靴を脱ぎ捨てた後ベッドに大の字で寝転がった。

麗奈「はー最高！　あはは！」

丈二、麗奈に話しかける。

丈二「なぁ……」

麗奈「すぅ、すぅ……」

しかし麗奈、既に眠っていた。

丈二、そんな麗奈にやさしく布団を掛けてあげる。

丈二「ふあぁ……」

丈二、眠くなり麗奈と同じベッドに腰掛ける。

麗奈「うぅっ、ぐすっ……」

丈二、麗奈が寝ながら泣いている事に気付き離れる。

そのまま部屋の椅子に腰掛け眠りについた。

○同・部屋　（日替わり朝）

麗奈、目覚めるとTシャツ姿で濡れた髪を拭く丈二を見る。

丈二、テレビを見て固まっている。

麗奈「どうしたの……？」

丈二「おいこれ……」

ニュース番組には丈二の顔が映っていた。

麗奈「これお兄さん?!」

ニュース番組の見出しには『少女誘拐事件』と書かれていた。

麗奈「誘拐?!　私自分から着いて行ってるのに！」

以下、画面上で

×　　×　　×

マスター、リポーターにインタビューを受けている。

マスター「なんかソワソワしてて変だとは思ったんですけどまさかあのまま誘拐するなんて……」

そしてニュースキャスターが麗奈の情報も提示する。

キャスター『行方不明なのは渚麗奈さん１６歳、昨晩家を出たきり帰って来ないと母親から連絡が。最後に目撃されたのは岬容疑者と車に乗り込む姿のため誘拐だと思われます』

次に麗奈母（３８）、顔を隠してインタビューに応じる。

麗奈母『最後に喧嘩しちゃって謝りたいんで

す、どうか娘を返して下さい……！』

×　　×　　×

丈二、焦りから足踏みをしてしまう。

丈二「これ以上背負えねぇって……」

丈二、革ジャンを羽織り部屋のキーを取る。

麗奈「え、どうするの……？」

丈二「予想以上にヤバい事になった……！」

丈二、頭を掻きむしり母の事も思い出す。

丈二「あーでも母さんがっ、どうしよ　う……！」

丈二、職場や直樹からの着信が山ほどある事を確認。

麗奈「お兄さん、私家には帰りたくないよ……？」

麗奈、丈二に縋る。

麗奈「お願い助けて！　ちょっとで良いから……！」

丈二、麗奈の目を見る。

丈二「はぁ……」

丈二、少し黙る。

丈二「どうなるか分からないぞ？」

麗奈「それでもいい」

丈二「よし、じゃあ行こう」

丈二と麗奈、準備を済ませて外へ出る。

○同・受付　（朝）

受付でチェックアウトを済ませる２人。

受付「はい確認しました」

丈二、カウンター内にあるテレビに自分たちが映っているのを見つけてしまう。

丈二「やべ……」

丈二と麗奈、慌てて退散し外へ出た。

麗奈「危なかったねぇ」

丈二「心臓もたねぇ……」

丈二と麗奈、そのまま車に乗り走って行った。

○警察署

直樹と刑事Ａ（４３）と刑事Ｂ（２８）、話している。

刑事Ｂ「うわラブホ行ってんすか、引きますわ……」

刑事Ａ「おい、そんなこと言うな」

刑事Ｂ「さーせん」

直樹、刑事Ｂの無礼を咎めない。

直樹「良いんですよ、アイツもやらかしてる身なんで」

直樹、目撃情報に目を通す。

直樹「やっぱ俺も追い詰めてたんですかね……」

刑事B「船場さんは悪くないっすよ、友人のこと考えてたんでしょう？」

直樹「ありがとうございます。でもどうすりゃ良かったんでしょう？」

刑事A、直樹の向かいに座る。

刑事A「えーさっき、母親のことでも追い詰められてたって言ってましたよね。具体的な話を聞かせてもらえませんか？」

直樹、少し考える。

直樹「はい、わかりました」

直樹、丈二との過去を語りだす。

直樹「アイツとは幼稚園から一緒なんですけどずっとお母さんは怖かったですね」

刑事A「なるほど……」

直樹「一回見たんですよ、幼稚園を出たあと車の前で思い切りぶたれる所。声は聞こえなかったけどお母さんは凄い顔してました」

直樹、涙声になる。

直樹「もっと前から何か出来た気がするんです……友達として」

刑事A、直樹にティッシュを差し出した。

刑事A「まだ出来ることはあります。まず彼を見つけましょう」

直樹「はい……」

直樹、ティッシュを受け取った。

○車の中

丈二、煙草を持つ手を窓から外に出している。

丈二、麗奈のセーラー服にGジャンを羽織った服装を見る。

丈二「その服、ミスマッチだな」

麗奈「そうだね、着替えようとしたとこだったから」

丈二「理解ないタイプ？」

麗奈、少し間を開けてから声のトーンを下げる。

麗奈「バレたら多分捨てられるよ」

丈二「マジで？」

麗奈「こういうの嫌いなんだって。映画とか音楽も」

丈二「お前が好きでも？」

麗奈「それがダメなんだって」

麗奈、眉間に皺を寄せる。

麗奈「お母さんは割と分かってくれるタイプなんだけど、これだってお母さんがこっそり買ってくれたから」

麗奈、着ているGジャンを指す。

麗奈「でもお父さんが本当に酷くて。音楽流しただけで怒られるし、だからヘッドホンで聞いてもそーゆーの聞くこと事態ダメだって取り上げられちゃった」

麗奈、貧乏ゆすりする。

丈二、麗奈の貧乏ゆすりを見る。

麗奈「あーもう、思い出しただけで腹立って来た……！」

丈二、遮る。

丈二「おい、大丈夫か……？」

麗奈、貧乏ゆすりを止め丈二を見る。

麗奈「ごめん、なんか」

沈黙。

丈二、頭を掻く。

丈二「音楽な、聴きたいか？」

麗奈「え、聴いていいの？」

丈二「当たり前だろ、俺の前だぞ？　禁止してくるヤツなんかぶっ飛ばしてやる」

麗奈、微笑む。

丈二、一度煙草を置き片手でスマホを弄る。

丈二「スマホに入ってるぞ、どんなの好　き？」

麗奈「もちろんロック！」

丈二「よしきた」

丈二、車のスピーカーとスマホを

Bluetooth で接続しプレイリストの一番上から流した。

丈二「ロックはいいぞ、これもハマると思う」

曲、イントロは静かだった。

麗奈、少し困惑する。

麗奈「ここから激しくなるの？」

丈二「聞いてろって」

曲、激しいパートに入る。

麗奈、歓喜した。

麗奈「おーカッコいいねコレ！」

丈二、煙草を手に取り少し俯く。

丈二「……はは、だろ」

麗奈、質問する。

麗奈「お兄さんさ」

丈二「ん？」

麗奈「楽器とか弾くの？」

丈二「っ……！」

麗奈、丈二の様子が変わった事に気付く。

麗奈「大丈夫……？」

丈二「いや、何でもない」

麗奈「本当に？」

丈二「ギターは弾けるよ」

麗奈「マジ？　いいじゃん！」

丈二「昔バンドやってたからな」

麗奈「今は？」

丈二「……クビになった」

麗奈「え？」

丈二「俺が作ったバンドなのにな」

丈二、声が大きくなっていく。

丈二「そんで方向性変えたら売れ始めてさ」

丈二、勢いよく煙草を吸い咽てしまう。

丈二「ぶっ、ごほごほっ……」

麗奈「大丈夫？」

丈二「あぁ、ちょっと思い出したら腹立って来た……」

丈二、もう一度煙草を吸う。

今度は咽なかった。

麗奈「その人たち見る目ないね」

丈二「そうか？」

麗奈「そうだよ！　ロックいいのに。自由な感じ楽しそう」

丈二、俯く。

丈二「でもな、自由って案外ひとりになるぞ」

麗奈、少し下を向いて黙ってから口を開く。

麗奈「私はお兄さんに会えたよ？」

丈二「それはっ……」

麗奈、笑う。

丈二、何も言えず前を見る。

そのタイミングでスマホに着信が。

丈二「ん……？」

着信画面には『母さん』と書かれている。

丈二「う、マジか……」

麗奈「お母さん？」

丈二「ヤバい、ニュース見たのか……？」

麗奈、動揺する丈二を見て提案する。

麗奈「警察から連絡いってない？」

丈二「分かんねぇ……」

麗奈「じゃあ私が話すよ」

丈二「は？」

麗奈、通話ボタンを押す。

丈二「あ、おい！」

由希、応答する。

由希「もしもし？　やっと出てくれたー！」

麗奈、いざとなると口を開けない。

由希「もしもし丈二？」

丈二、恐る恐る応答する。

丈二「もしもし母さん……？」

由希「久しぶりに声聞けた、今何してる？　もう職場？」

丈二「向かってる所だから大丈夫だよ、どうした？」

由希「電話はいつも朝してるでしょ？　でも出てくれて良かった、なんか今日スタッフの人がテレビ見せてくれなくて暇してたのよ～」

丈二「そっか、何でだろうね……？」

由希、話を逸らした。

由希「そいえば今月の振り込みもうすぐだからお願いね」

丈二「あ、あぁ……」

由希「本当助かるわー」

丈二「はは……」

由希「じゃあ切るね、お仕事頑張って」

由希、電話を切る。

丈二、大きな溜息を吐いた。

麗奈「そいえば仕事は？」

丈二「あ、いや……」

丈二、必死に誤魔化す。

丈二「えっとな、こんな事してアレだろ。仕事なんて行けないだろ」

麗奈「そうだよね、ニュースにもなってるし」

麗奈、話題を変える。

麗奈「にしても何今の！　仕事とか振り込みとかさ、息子からお金取ろうとしてんの？」

丈二「母さんのグループホーム代、家賃みたいなもんだよ」

麗奈「え？　なんでお兄さんが払ってんの？」

丈二「さぁ、何でだろ……」

麗奈「そっちも結構大変じゃん」

丈二「……まあ、親って面倒だよな」

麗奈、微笑む。

麗奈「ふふ、何それ」

丈二、運転しながら複雑な表情を浮かべる。

麗奈、窓の外に遊園地があるのを見つける。

麗奈「わぁ、遊園地だ」

丈二、麗奈の眼差しを見る。

丈二、恐る恐る提案をした。

丈二「なぁ、あそこ行った事あるか？」

麗奈「ううん無いよ？　え、もしかし　て……」

丈二「遊んでみるか？」

麗奈「やったぁ！」

丈二、麗奈の嬉しそうな表情を見てハンドルを切った。

車、遊園地へ入って行く。

○遊園地・入場口

丈二、クレジットカードで支払う。

丈二「クレカで」

受付「はい、ありがとうございます」

丈二、チケットを2人分受け取る。

丈二と麗奈、チケットを手に入場する。

麗奈「本当にいいの？　払ってもらっちゃって」

丈二「良いよ良いよそんくらい」

○同・園内

麗奈、様々なアトラクションを見て歓声を上げる。

麗奈「わーすごい！」

麗奈、走り出した。

振り返り丈二に手を振った。

麗奈「お兄さんも早く！」

丈二「あいよ」

丈二、チケットを財布に仕舞おうとする。

その際に由希のグループホームの振り込み用紙を見つける。

丈二「はぁ……」

丈二、振り込み用紙をしまい麗奈の所へ。

丈二「お待たせ」

×　×　×

丈二と麗奈、ジェットコースターに乗る。

麗奈「わぁぁー！」

丈二「ぐぅぅっ」

丈二、髪型が崩れるのを気にしていた。

×　　×　　×

丈二と麗奈、続いてお化け屋敷に。

丈二「うわぁっ！」

麗奈「お兄さん弱いなぁ」

丈二「だってよぉ……」

麗奈「じゃあリタイアする？」

丈二「それはっ……」

丈二、麗奈の楽しそうな顔を見て決心する。

丈二「いや、頑張る」

麗奈「ふふっ、いいねぇ」

×　　×　　×

丈二と麗奈、お化け屋敷を完走。

丈二「よっしゃぁぁぁ！」

麗奈「やるねぇお兄さん！」

麗奈、丈二に手を差し出す。

丈二、その手にハイタッチをした。

丈二「楽しいか？」

麗奈「うんっ！」

麗奈、大きな笑顔を見せた。

○同・フードコート

丈二と麗奈、席に座り食事を取る。

丈二、こっそりクレジットカードを見ていた。

丈二「遊園地のメシって高いな……」

麗奈、豪華なセットメニューを食べている。

対する丈二、ポテトだけ食べていた。

麗奈「お兄さんそれだけで足りるの？」

丈二「俺はいいんだ、小食だからな」

麗奈「ふーん」

麗奈、丈二の顔を見る。

麗奈「ねぇ、デザート食べていい？」

丈二、少し苦笑いを浮かべる。

丈二「分かった、何がいい？」

麗奈「んとねー、あ！　ソフトクリーム！」

麗奈、マスコットキャラをテーマにした７００円のソフトクリームを指さす。

麗奈「せっかくだしお兄さんも食べようよ」

丈二「分かった……」

丈二、そのソフトクリームを注文する。

丈二「えっと、これ2つ……」

丈二、正式名称は言わなかった。

店員「はい、1400円になります」

丈二「クレカで」

しかし、残高不足と表示されてしまう。

丈二「え、マジか……っ！」

丈二、頭を思い切り掻きむしる。

麗奈、残念そうな顔を浮かべた。

丈二「ごめん、金がもう……」

丈二と麗奈、再び席に腰掛ける。

丈二「あークソッ」

麗奈「え、そこまで落ち込まなくても……」

丈二「ちょっと煙草……」

丈二、ポケットから煙草を出し喫煙所に向かった。

○同・喫煙所

丈二、壁にもたれかかりながら煙草を吸う。

丈二「最悪だ、最悪……」

丈二、壁を何度か叩く。

○同・広場

丈二、麗奈を待たせている広場に行く。

丈二「はぁ、お待たせ……」

麗奈「やっと戻ってきた！　ホラ、溶けちゃうよ？」

麗奈、両手にソフトクリームを一つずつ持っている。

丈二「え……？」

麗奈「ホラ、早く食べないと！」

麗奈、丈二にソフトクリームを一つ渡し自分のを食べる。

丈二「これ、何で……」

麗奈「親のクレカ。家出する時に持って来たんだ」

麗奈、ゴールドのクレジットカードを見せる。

丈二「何だよぉ……っ」

丈二、膝から崩れ落ちる。

麗奈「ごめんごめん。なんかお兄さん張り切ってたから」

丈二「でも払わせちまった……」

麗奈「いいって！　連れてきてくれたんだし！」

丈二、顔を上げて立ち上がる。

丈二「ごめん、実は今まで嘘ついてた」

麗奈「そう……」

沈黙。

麗奈、観覧車の方を指さした。

麗奈「じゃあさ、そこで話して？」

丈二「あぁ」

○同・観覧車

丈二と麗奈、観覧車に向かい合って座る。

丈二「昨日さ、自由って言ってくれたけど……違うんだよ」

麗奈「そうなんだ……」

丈二「怖くなって、全部投げ出しただけ。お前にもカッコつけてた」

麗奈「そっか……」

丈二「失望したよな、ごめん……」

麗奈、優しい目に変わり言った。

麗奈「私言ったよ？　『最高』って」

丈二「え……？」

麗奈「それは全然今も変わってないよ」

丈二「お前……」

麗奈「ちょっと、何しんみりしてんの？　まだまだ楽しむんだから、明るく行こ？」

麗奈、丈二の肩を叩く。

丈二「おいやめろっ！」

丈二と麗奈、笑っていた。

そのまま夕日に照らされる観覧車から降りた。

○同・出口までの道

丈二、歩きながら隣の麗奈に言う。

丈二「よし、次にやりたい事とかあるか？」

麗奈「うーん」

麗奈、辺りを見渡す。

麗奈「あ！　アレでいいの取って！」

麗奈、射的コーナーを指さした。

丈二「マジかよ……」

丈二、苦笑いを浮かべた。

麗奈「あ、ちなみに生バンド見れる所にも行ってみたいからさ、なるべく急いでね」

麗奈、更に丈二を急かした。

×　　×　　×

丈二、奥にあるモデルガンを狙うが外してしまう。

店員のおじさん、溜息を吐く。

丈二「うわ、また外した……」

店員「兄ちゃんそろそろ閉園だよ、その辺にしときな？」

丈二「あと一回だけ……」

丈二、息を切らしている。

麗奈、丈二が息切れしているのを心配そうに見ていた。

麗奈「お兄さん、もういいよ」

丈二「いやお前がやれって……」

丈二、モデルガンを指さす。

麗奈「うん、だから私がやる」

丈二「え……？」

麗奈「見てて、カッコよく決めるから」

麗奈、驚く丈二から玩具の銃を受け取る。

麗奈、慣れた手付きでコルク弾を詰める。

丈二、驚いた顔で見ていた。

麗奈、そのまま玩具の銃を構えて一発放った。

麗奈「はいっ！」

麗奈、一発目を当て景品が少しズレる。

麗奈「もういっちょ！」

麗奈、二発目も当て更に景品を大きくズラす。

麗奈「これで最後っ！」

麗奈、最後の一発を景品の中心に当てた。

一同、息を呑む。

景品、長い時間をかけてゆっくりと後ろに倒れた。

丈二「お……？」

麗奈「やったー！」

店員「こりゃたまげた……」

店員、麗奈にモデルガンを渡す。

麗奈、早速開封しモデルガンを構えてみせた。

麗奈「どう？　イケてる？」

丈二「とんでもなく似合ってるよ……」

丈二と麗奈、遊園地を後にした。

○車の中　（夜）

麗奈、スマホで検索をしている。

丈二に画面を見せた。

麗奈「あ、近くにライブハウスあるよ！　今日もこれからライブやるって！」

丈二「いいんじゃね？　ここなら行った事あるし」

麗奈「ホント？　バンドやってた時代？」

丈二「そうそう、いいとこだよ」

丈二と麗奈、ライブハウスに着いて車を停めた。

○ライブハウス　（夜）

麗奈、出演バンドの看板を見る。

麗奈「♂66だって！」

丈二「マジかよ……」

丈二、顔をしかめる。

麗奈、丈二の手を引っ張った。

麗奈「早くいこ！」

麗奈、中に入り歓声を上げる。

麗奈「すごぉい！　ミラーボール！」

麗奈、多くの客の中を掻い潜って行く。

麗奈「へぇ、バーもあるんだ」

しかし丈二、反応を見せない。

麗奈「ねぇ聞いてるの～？」

丈二「あ、ごめん……」

麗奈「さっきからボーッとして、もしかしてトラウマでも蘇った？」

麗奈、丈二の脇腹をつつく。

丈二「おいやめろっ……」

金村（２５）、丈二を見つける。

金村「あれ、岬じゃん。来てくれたの？」

金村の他にバンドメンバーが二人、派手な身なりをしている。

丈二、冷や汗が流れた。

麗奈「もしかして出る人？　お兄さん知り合いなの？」

麗奈、丈二の顔を見て察する。

麗奈「もしかして……」

丈二「あぁ、俺が作ったバンドだよ……」

金村たち、笑って言う。

金村「いやぁ久しぶりだな。そうだ、アンコールとかでまた一緒にやらないか？限定でさ」

丈二「えっと、まぁ……考えておくよ」

金村「マジで！　PAさんにも言っとくから、お前のこと覚えてるかも！」

金村たち、準備に向かう。

丈二「はぁ……」

麗奈、溜息を吐く丈二を見つめていた。

×　　×　　×

暗くなりライブが始まる。

観客たちの期待の声が聞こえていた。

明るい音楽と共に金村たちがステージ上に現れる。

金村「来たぜホーム！」

歓声が上がる中で丈二はノれなかった。

そんな彼を置いてライブは盛り上がる。

丈二のやりたかったロックとは程遠いポップスに近いサウンドが響く。

丈二、麗奈を見た。

麗奈、複雑な表情を浮かべる。

×　　×　　×

ライブが終わりアンコールとなる。

金村「ありがとー！」

金村、MCを始める。

金村「今日は皆さんに報告があります、メジャーデビュー決定しましたー！」

客席は大いに沸く。

丈二は逆に更に肩を落とした。

金村「紆余曲折ありましたがお陰様でここまで来れました！」

金村、そこで丈二を見る。

金村「この最高のメンバー達と出会わせてくれた影の立役者が来てくれてます！」

丈二にスポットライトが当たる。

金村「創設者にして初代リーダーの丈二くんです！　ホラ、上がって！」

金村、手招きをする。

丈二、重い足取りで仕方なくステージに上がる。

丈二、客席を見て圧倒されてしまった。

金村、丈二にマイクを渡した。

丈二「えっと、こんばんは……」

丈二、何も言えなくなってしまう。

金村、見兼ねて話を続けた。

金村「今日はちょっと珍しいのやります。結成当時のスタイルで」

客席から「おおー」と声が上がる。

金村、予備のギターを丈二に手渡す。

金村「ホラ、ギターも用意してるぜ？」

丈二、仕方なく受け取りサウンドチェックをするが緊張で上手く弾けない。

観客を気にしてしまう。

金村「はは、久々で緊張してんのか　な……？」

丈二、焦りで呼吸が荒くなる。

丈二「はぁ、はぁ……っ」

そんな時、客席から声が響く。

麗奈「お兄さんっ！」

一同、一斉に麗奈の方を向く。

丈二「お前っ！」

麗奈「やってよ！」

丈二「え？」

麗奈「さっき聴かせてくれたやつ！　私、好きだったよ！」

丈二、麗奈を見つめる。

麗奈「聞かせて！」

丈二、目に光が灯る。

金村に伝えた。

丈二「準備いいぞ、曲はアレでいいな？」

金村「お、いいね」

ライブハウスは静まり返る。

丈二、準備を完了させた。

丈二「……よし」

×　　×　　×

ドラマーの合図でギターを思い切り掻き鳴らす。

今までと遥かに違うサウンドに観客は驚いていた。

インストゥルメンタルの曲に戸惑う観客。

丈二もそれを感じ取る。

そのまま曲はベースソロへ。

そちらの方が盛り上がってしまった。

休みの間、丈二は気が落ちてしまった。

しかし自分のパートが近づく時、麗奈の姿が目に入る。

麗奈、丈二を見て優しく微笑んだ。

その表情を見て覚悟を決めた。

クライマックスで更に強くギターを掻き鳴らした。

丈二、麗奈を見る。

麗奈、満面の笑みでリズムを取っている。

丈二、その姿だけを見て再びギターを掻き鳴らす。

完璧に締められた曲。

まばらな拍手。

数人は歓声を上げるが、さっきほどの盛り上がりではない。

その中で一際大きな声。

麗奈「ひゅー！　最高ー！」

×　　×　　×

麗奈、興奮した様子で丈二に絡む。

麗奈「あれだけ出来るなら言ってよぉ」

丈二「はは……」

金村、片づけを終えて出て来る。

金村「お疲れ、まだどっかでやってんの？」

丈二「いや、もう音楽はやってない……」

金村「マジで？　全然弾けんじゃん！」

丈二、麗奈の頭に手をのせて言う。

丈二「一応コイツが聞きたいって言うから」

麗奈、驚いている。

麗奈「なにそれ！」

麗奈、丈二の背中を叩く。

丈二「痛ってー！」

金村、二人を見て微笑む。

金村「いいな、なんか」

丈二「何が？」

金村「楽しそうじゃん、お前」

丈二、表情が柔らかくなる。

丈二「まぁな」

丈二、麗奈を連れて車に戻った。

○車の中（深夜）

丈二、深夜の山中を運転する。

麗奈、助手席で眠っていた。

丈二、眠る麗奈を見て流れる音楽を止めようとスマホに手を伸ばす。

麗奈、丈二の手を掴んだ。

麗奈「止めないで……」

麗奈、半分寝ながら反応した。

丈二、曲を静かなバラードに切り替える。

麗奈、助手席で眠り続ける。

丈二、ひたすら前を見て運転。

以下、バラードに乗せて台詞、現場音なしのモンタージュ。

×　×　×

○グループホーム・由希の部屋　（深夜）

由希、ベッドで眠っている。

枕元には丈二の写真。

×　　×　　×

○警察署　（深夜）

刑事Aと刑事B、防犯カメラの映像や

資料を確認している。

直樹もその隣に座り、丈二の行きそうな場所を地図で示している。

三人とも疲れた様子だが捜索を続ける。

×　　×　　×

○車の中　（深夜）

丈二、運転する。

麗奈、助手席で眠っている。

カーナビには近くに海がある事が記されていた。

車、暗い山道を走り続ける。

やがて空が白み始める。

朝日が昇った。

麗奈「んんっ……」

麗奈、朝日が差し込み目覚める。

朝日に照らされた海を見つけた。

麗奈、テンションが上がる。

麗奈「わぁ海！」

丈二も海に気付く。

丈二「起きたか、おぉ凄ぇな」

麗奈、浜辺も見つける。

笑顔で丈二に振り向いた。

麗奈「お兄さん！」

丈二「あぁ」

丈二、麗奈の意図を理解しハンドルを切る。

○浜辺　（早朝）

麗奈、丈二を置いて走り出す。

靴と靴下を脱ぎ両手に持ったまま海に足をつけた。

丈二、ゆっくり歩きながら煙草に火を点ける。

麗奈、はしゃいでいる。

麗奈「あははっ、冷たーい！」

麗奈、丈二に手招きした。

丈二、麗奈に手を振る。

朝日に照らされながら煙草を吸う。

丈二、スマホを取り出し連絡先から由希を選ぶ。

そのまま電話をかけた。

由希、眠そうに応答した。

由希「丈二……？　こんなに早くどうした　の？」

丈二「母さん、今日そっち行っていいか　な？」

由希「え、いいけど何で……？」

丈二「話したい事があるんだ」

丈二、それだけ伝えて電話を切る。

そのまま麗奈を見つめた。

○車の中　（朝）

丈二、緊張しながら運転する。

麗奈、心配そうな視線を向ける。

麗奈「大丈夫？」

丈二「あぁ、緊張するけど」

丈二、顔は引き攣り手も震えている。

麗奈「あんま無理しない方が……」

丈二「いや、そろそろ向き合わないと」

○グループホーム　外観　（朝）

丈二、車を停める。

二人、車を降りた。

丈二、入口のインターホンに手を伸ばし固まる。

麗奈「私が押そうか？」

丈二「いや、自分で……」

丈二、震える指でインターホンを押した。

職員、応答する。

職員「お話は伺ってます、中へどうぞ」

二人、案内され中へ入る。

○グループホーム　廊下　（朝）

職員、警戒しながら二人を案内する。

ある部屋の扉をノックし開けた。

由希「はーい」

職員、扉を押さえ二人は部屋へ入る。

○グループホーム　由希の部屋　（朝）

二人、由希と向き合う。

由希、痩せこけた姿で立ち上がった。

由希「丈二、よく来たね」

丈二「あぁ……」

由希「それで話って何なの？　大体想像つくけどねー」

　由希、二人を座らせコーヒーを淹れる。

　そのままカップを差し出した。

丈二「話の事なんだけど……」

由希「良いのよ緊張しなくて！」

丈二「うん……」

　由希、二人に向かい合い座る。

由希「ホラ話して」

丈二「うん、ガッカリしないで欲しいんだけど……」

　由希、表情が一瞬暗くなる。

　しかしすぐに明るくした。

由希「あぁ大丈夫だよ、全然大丈夫っ」

丈二「本当に？」

由希「だってあなた私の天使じゃない」

丈二「そう、だったね……」

　由希、棚に飾ってある写真立てを見せる。

　丈二が小学校受験に合格した時の写真だった。

由希「この頃から優秀でねー」

麗奈「そうなんですね……」

由希「あ、ごめん話逸らしちゃったね、で何話って？」

丈二、深呼吸し自分に言い聞かせた。

丈二「ふぅぅ、大丈夫……」

丈二、姿勢を正す。

丈二「母さん、驚かないで聞いて欲しいんだけど」

由希「えー何かしこまって、そんな驚かないよ」

丈二、頭を下げた。

丈二「ごめん！」

由希「え、何で謝るの……？」

丈二「俺ずっと母さんに嘘ついてた。実は俺、会社員じゃないんだ」

由希「え……？」

丈二「彼女もいない。仕事も……バイト」

由希「え、え……？　そんな冗談言ってー」

丈二、スマホを取り出す。

丈二「あとこれ、見て欲しい」

画面には丈二のニュース記事が写っている。

丈二「今、警察にも追われてるんだ」

由希「え、誘拐って……」

麗奈、割って入る。

麗奈「あ、誘拐は誤解なんですけどねっ」

由希、固まってしまう。

由希「ちょっと待って、揶揄ってるの？」

丈二「いや、本当なんだ」

麗奈「はい」

由希「え、じゃあこれからどうするの……？」

丈二「分かんないけど……頑張る」

　由希、目が虚ろだった。

由希「待って分かんない、嘘って……この子は何なの？」

　由希、麗奈を指さす。

丈二「……友達」

由希「じゃあ出世したのも可愛い彼女がいるのも……？」

丈二「うん……」

由希「……でも、お金は？　毎月ちゃんと振り込んでくれたじゃない」

丈二「……無理して払ってた」

由希「じゃあ出世とかは？」

丈二「だから、それも嘘」

由希「……」

　沈黙。

　そして由希、テレビのリモコンを投げつける。

由希「ふざけるな！　出てけこの疫病神！」

　由希、手当たり次第に近くのものを投げつける。

由希「アンタが生まれて全部ダメになった、何もかも最悪！」

由希、合格した写真すら投げつける。

丈二と麗奈、顔を守っている。

由希「ふざけるなぁ……！」

由希、コーヒーカップを投げつけ麗奈の肩に命中。

麗奈「いたっ……」

麗奈、尻餅をつく。

由希、それを見て固まる。

丈二、麗奈に駆け寄る。

丈二「おいっ、大丈夫か?!」

麗奈「うん、ビックリしただけだから……」

丈二、由希に叫ぶ。

丈二「母さん、もうやめてくれ！」

丈二、這いつくばりながら懇願する。

丈二「俺ちゃんとするからさぁ……！　もう全部背負わせないで……！」

由希「いや、そんなの知りたくなかった……！」

丈二「それじゃあ……」

丈二、口を止める。

そのまま立ち上がり麗奈を立たせた。

丈二「……行こう」

丈二、麗奈の手を引き部屋から出る。

由希「二度と来るなぁ！」

○グループホーム　外観

二人、入口前の段差に腰掛ける。

丈二、煙草に火を点け吸い始めた。

丈二「俺さ、頑張ったよ」

麗奈の方を見ずに呟く。

丈二「頑張ったんだよ沢山、母さんのため　に」

丈二、涙が溢れる。

丈二「本当にさぁ、頑張ったんだって……なのに何でこうなるのかなぁ？」

麗奈「お兄さん……」

麗奈、丈二の肩を抱き寄せる。

麗奈「よく頑張ったね……」

丈二、麗奈の抱擁を受け入れる。

麗奈「……私もさ」

丈二「ん？」

麗奈「家出って言ったじゃん」

丈二「あぁ」

麗奈「あれ、ちょっと違うんだ」

丈二「……？」

麗奈「追い出されたの」

麗奈、丈二の頭を撫でる。

麗奈「お父さんにこのGジャン見つかって捨てられそうになってさ、お母さんに頼ったんだ。でもなんかお父さんの味方してね」

麗奈、目に涙を浮かべる。

麗奈「それでショックでお母さんにもたくさん酷いこと言った気がする。そしたらお父さんが出てけって」

丈二「そうか……」

麗奈「私もう会いたくないって思った。だからお兄さん偉いよ、ちゃんと向き合ったじゃん」

丈二「でもダメだった……」

丈二、前を向いて言う。

丈二「俺らって何なんだろうな？」

パトカー、二人の目の前に停まる。

丈二「えっ……」

麗奈「もしかして……?!」

麗奈、グループホームの窓を見る。

カーテンが閉められており中は見えなかった。

警官、降りて来て告げる。

警官「岬丈二だな。車の窃盗と少女の誘拐容疑で逮捕する」

丈二、右腕に手錠をはめられてしまう。

振り返ると麗奈が心配そうな顔をしていた。

麗奈にも警官が近付く。

麗奈、嫌がり丈二を見た。

丈二「あぁっ」

丈二、唇を噛む。

丈二、手錠を見る。

麗奈を見る。

麗奈に警官の手が伸びる。

丈二、呼吸が乱れる。

咄嗟に麗奈のポケットに手を突っ込みモデルガンを取り出す。

そのまま後退し麗奈の頭に銃口を突きつけた。

手が震えておりモデルガンもカタカタと音を立てる。

麗奈「えっ?!」

丈二「近付くな！　コイツを撃つ！」

警官、身構える。

丈二、そのまま麗奈を人質にして建物内へ入った。

○グループホーム　広間

丈二、右手に手錠がついたまま歩き回る。

グループホーム利用者と職員は怯えていた。

利用者たちは母と同じ精神疾患を抱えた者たちだ。

麗奈、心配そうに丈二を見つめる。

丈二「クソクソッ、何やってんだ俺……！」

丈二、モデルガンを持つ反対の手で頭を掻きむしる。

麗奈「お兄さん、やり過ぎだよ……！」

丈二「他に方法ないだろ！」

丈二、麗奈にキツく言ってしまった事を反省する。

丈二「ごめん、ちょっと……」

警官、拡声器で呼びかける。

警官「人質を解放し出て来なさい」

丈二、一人で呟く。

丈二「お前らが撤退したら出てくよっ」

麗奈「こんなんじゃ退かないよ?!」

麗奈、丈二の足にしがみつく。

丈二「分かってるよ、でもどうすりゃ良いんだよ……！」

職員、丈二に声を掛ける。

丈二、驚いて振り向く。

職員「あ、あの……ここの利用者だけでも解放してもらえませんか？　貴方のお母さんも

いるでしょ……？」

丈二「アイツの話しないで下さいよ……！」

警官、更に拡声器で呼びかける。

警官「今の内に自首すればまだ刑期は……」

丈二、そこで遮るように叫ぶ。

丈二「警察もクソだ、もう全部クソだよ！

何で何も分かってくれねぇんだ……」

利用者の男性、パニックになってしまう。

利用者「うっ、うぅぅ……」

丈二、そんな利用者を見て更に頭を掻きむしる。

麗奈に指示を出した。

丈二「水でも飲ませてやれっ……」

麗奈、震えながら立ち上がりウォーターサーバーから水を一杯汲み利用者に渡す。

麗奈「すみません、これ飲んで下さい……」

利用者、水を飲む。

利用者の側にいる職員、麗奈に問う。

職員「貴女は何なんですか……？」

麗奈「私は……」

麗奈、丈二を責める。

麗奈「もうやめてよ、関係ない人まで巻き込みたくない！」

丈二「分かってるよそんなの、でも……」

直樹、拡声器で呼びかける。

直樹「丈二、いるのか！」

丈二「直樹……」

麗奈「え、誰……？」

丈二「車の持ち主だよ」

直樹、更に拡声器で呼びかけた。

直樹「今からお前に電話する、出てくれ！」

丈二のスマホに電話が。

相手は直樹だ。

丈二「もしもし……？」

直樹「丈二、本当にお前なのか?!」

丈二「あぁ……」

直樹「お前何でここに、もしかして……」

丈二「母さんに全部話したよ」

直樹「マジか、どうだったんだ……？」

丈二「上手く行く訳ないだろ、俺のこと疫病神だってさ」

直樹「そうか……」

丈二「ちゃんと頑張ったよ！　でももうどうしようもねぇ！」

直樹「じゃあ麗奈さんは何なんだ……？」

丈二「はぁ……？」

直樹「何で誘拐したままなんだよ？」

丈二「アイツは自分から着いて来たんだ。誘拐なんかじゃねーよ」

直樹「じゃあ麗奈さんも共犯なのか？」

丈二「知らねぇよ、もう何も分かんねぇ！」

直樹、少し沈黙。

直樹「その、麗奈さんの両親がな……」

丈二「え……」

丈二、スマホを耳に当てながら固まる。

麗奈に呼びかけた。

丈二「おい、お前の親が！」

麗奈「え?!」

麗奈父(52)、直樹から拡声器を貰う。

隣には麗奈母もいた。

麗奈父「麗奈！　いるなら返事してくれ！」

麗奈「お父さん……」

麗奈父「君、それも貸してくれないか」

麗奈父、直樹からスマホを借りる。

丈二に話しかけた。

麗奈父「もしもし、岬丈二くんかな？」

丈二「そうです……」

麗奈父「悪い事は言わないから、娘を返して欲しい。お願いだ」

丈二、溜息を吐いて考える。

そのまま麗奈にスマホを差し出した。

丈二「お前の親父さんだ、話すか？」

麗奈「うん……」

麗奈、スマホを受け取り耳に当てる。

麗奈「もしもし……？」

麗奈父「麗奈！　無事か?!」

麗奈「私は大丈夫だよ……」

麗奈父「すぐ警察が何とかしてくれるから　な、もう少しの辛抱だぞ」

麗奈「うん……」

麗奈父「あぁ、待ってろ」

麗奈「ねぇ！」

麗奈父「何だ？」

麗奈「あのさ……」

麗奈、震えながら問う。

麗奈「無事に帰れたらまた元の生活に戻るの……？」

麗奈父「すぐにとは行かないかも知れないけど、なるべく早く戻りたいよな、ただでさえ

ホラ、赤点だったろ？」

麗奈、少し黙る。

麗奈父「麗奈……？」

麗奈「お父さん、やっぱ何にも分かってないよ」

麗奈父「何だって……？」

麗奈「私は自分から着いて行ってるの、帰りたくないからっ……！」

麗奈、そのまま電話を切る。

そして丈二にスマホを返した後、丈二に身を寄せた。

麗奈「私やっぱ帰りたくない……！」

丈二「お前……」

○グループホーム　外観

麗奈父、切られた通話画面を見ていた。

麗奈父「どういう事だ……？」

麗奈母「何て……？」

麗奈父「自分の意思で着いて行った、帰りたくないって……」

麗奈母「やっぱり……」

麗奈父「何だと？」

麗奈母「私たちのせいね、ずっとあの子のこと否定してきた……」

麗奈父「いや、それが麗奈のためだったろ？」

麗奈母「それで私たちの思い通りの大人になって麗奈は幸せなの？」

麗奈母、涙を流す。

麗奈母「ごめんなさい、ごめんなさい……」

麗奈父、頭を抱える。

直樹、その様子を見ていた。

○グループホーム　広間

麗奈父の拡声器による呼びかけが響いている。

麗奈、丈二に身を寄せ耳を塞いでいる。

しばらくして声が止む。

丈二「大丈夫だ、もう声はしない」

麗奈、丈二から離れ耳から手を離す。

麗奈「……分かるでしょ、私の気持ち」

丈二「あぁ」

沈黙。

丈二、口を開く。

丈二「お前さ……」

すると外から大きな揺れが伝わって来る。

丈二は察した。

丈二「まさか……」

○グループホーム　外観

大型の警察車両がやって来た。

停車した後、中から特殊部隊が現れる。

隊員の一人が敬礼した。

隊員「到着しました！」

直樹、焦る。

直樹「丈二……！」

特殊部隊、それぞれ持ち場に移動する。

隣の建物の窓からスナイパーまで覗いていた。

直樹、警官に詰め寄る。

直樹「やり過ぎですよ！」

警官「相手は銃を持ってるんですよ！」

直樹「クソッ、早く出て来いよ……！」

麗奈父、身を乗り出し警官数名に止められる。

麗奈父「麗奈はどうなる?!」

麗奈母「落ち着いて！」

○グループホーム　広間

丈二、再度直樹から来た電話に応答する。

直樹「特殊部隊が来た、もう最後だぞ！」

丈二「だからもう無理なんだよ！」

直樹「早く自首しろって！」

丈二「そしたら何も意味ねぇんだって！　ずっと惨めになるだけだし、アイツも……！」

丈二、麗奈を見る。

直樹「どういう事だよそれ」

丈二「あっ……」

直樹「もしかしてさ、麗奈さんの事も心配してんのか……？」

丈二「分かんねぇよ今更……」

直樹「じゃあ何で立て籠もってる……？」

丈二「知らねぇって……」

直樹、少し沈黙。

直樹「丈二、麗奈さんもそこにいるんだろ……？」

丈二「あぁ……」

直樹「じゃあちょっと話させてくれないか？」

丈二「何で……」

直樹「いいからっ」

丈二、スマホを耳から離す。

麗奈に近付いた。

麗奈「……え、何？」

丈二「えっと……」

丈二、少し考えてから床に胡座をかく。

麗奈、それに合わせて向かいで正座した。

丈二、スマホを二人の間に置きスピーカーをオンにした。

丈二「直樹」

直樹、話し始める。

直樹「えっと麗奈さん、そこにいるかな？」

麗奈「はい……」

直樹「何でソイツと一緒にいるの？」

麗奈、間を開けて答える。

麗奈「えっと、私と一緒だと思ったから。お兄さんが否定されると私も否定されてる気がして……」

直樹「そっか、一緒か……」

直樹、間を開けて話す。

直樹「丈二はどう？　何で麗奈さんと一緒にいる？」

丈二「俺は……初めて本当に認めてもらえたような気がしたから……」

また沈黙。

直樹「……ごめん」

丈二「何でお前が謝んだよ」

直樹「ここまで追い詰めちゃったから……」

丈二「いや、それはいいよ……」

直樹「心痛いけどさ、ここまでしたお前たちを何とかしてやる事はもう出来ない」

丈二「分かってるよ……」

直樹「でもさ、このまま嫌な感じで終わらせたくもないだろ？」

丈二、麗奈と目を合わせる。

丈二「あぁ……」

直樹「もしかしたら向き合うだけ無駄だって思ってるかも知れないけどさ、俺もお前とちゃんと向き合ってみる」

丈二、唇を噛む。

直樹「だからそれが出来たら返してほしい。出来る限りの事はするから」

丈二と麗奈、黙って聞いている。

直樹「だってもう分かってるんじゃないの？

あのさ、二人で旅してる間どうだった？」

丈二、沈黙。

麗奈、口を開いた。

麗奈「えっと……その時は楽しかったです」

丈二、顔を上げ麗奈を見る。

麗奈「こんなになっちゃったけど……うん、本当にそう思います」

直樹「……ありがとう」

麗奈「いえ……」

直樹「丈二、全員が麗奈さんみたいには行かないかも知れない。でも少なからず俺はお前と楽しくやりたいよ」

丈二、周囲を見渡す。

人質となっている利用者や職員たちが震えていた。

丈二「でも俺これだけの事しちまった、そんなヤツの事……」

直樹「そんなの分かってるって、それを理由に見捨てはしないよ。俺はこれからのお前と楽しくやりたいんだ」

丈二、スマホ画面を見つめる。

直樹「大変だと思うけどさ、やる事はちゃんとやって。償うんだよ。俺も出来る限りは助けるからさ」

丈二「本当に……？」

直樹「うん。だってお前もう別人だ、麗奈さんと会って変わったな」

丈二「うん、そうだな……」

直樹「ちょっとさ、二人で話してみろ。旅の振り返りでもしてさ、ちゃんとお互い納得してこれからのこと決めろよ」

丈二「ありがとう、そうする」

丈二、電話を切った。

丈二、少し黙ってから口を開く。

丈二「なぁ、この旅してさ。後悔してる？」

麗奈「全然。してないよ」

丈二「うん、俺も」

丈二、周囲を見渡す。

怯えるスタッフと利用者たちがいた。

丈二「あ、今の言い方良くなかったな」

麗奈「そうだね、なんか複雑」

丈二「うん……まぁでもさ、遊園地とかライブとか海とかさ。そこまではちゃんと楽しかった」

麗奈「うん、私も」

丈二と麗奈、顔を見合わせる。

丈二「じゃあもうクヨクヨしてても意味ねぇな。普通に楽しかった事もあったんだし」

丈二、ゆっくりと立ち上がった。

丈二「麗奈、行くか」

麗奈「え！」

麗奈、初めて名前を呼ばれ驚く。

丈二「俺たち、また会えるようにしようぜ」

丈二、麗奈に手を差し伸べる。

丈二「ホラ、立てるか？」

麗奈、丈二の手を取る。

麗奈、立ち上がる。

麗奈「でも怖いよ」

丈二「俺も」

麗奈「そっか……」

丈二と麗奈、歩き出す。

丈二、人質たちに声を掛け頭を下げる。

丈二「すみませんでした、もう出て大丈夫です」

人質たち、戸惑いながらも出ていく。

○グループホーム　外観

警官、人質たちが出て来た事に驚く。

警官「人質がどんどん出て来ます！」

警官、職員に話を聞く。

警官「何があったんですか?!」

職員「突然解放してくれるって……」

一同、戸惑いを隠せない。

○グループホーム　広間

丈二、職員に由希が連れられるのを見つける。

丈二「母さん……」

由希、目が虚ろだった。

丈二、手に持ったモデルガンを捨てて由希に歩み寄る。

丈二「母さん、大丈夫？」

由希「あぁ、大丈夫……」

由希、丈二を見ないまま答える。

丈二「よかった……」

由希、無言のまま職員に連れられ外へ出た。

麗奈「大丈夫？」

丈二「うん、ありがと」

丈二と麗奈、人質が全員外に出たのを確認し外へ向かう。

○グループホーム　玄関

丈二と麗奈、外に向かい歩く。

丈二「あーあ、刑務所か」

麗奈「私も親と話さなきゃなぁ」

丈二「出たらさ」

麗奈「うん」

丈二「また会ってくれるか？」

麗奈「もちろん」

麗奈、優しく微笑む。

丈二と麗奈、玄関から外へ出た。

○グループホーム　外観

警官たち、二人が出て来たのを確認。

警官「犯人が人質を連れて外へ！」

警官たち、無線で様々なやり取りを行う。

丈二、立ち止まり麗奈と向き合った。

丈二「なぁ、俺がムショにいる間は一人だろ？」

丈二、ポケットに手を入れる。

警官たち、焦る。

警官「マズい、銃を出すぞ……！」

警官、無線で特殊部隊に伝える。

警官「おいポケットから手を出せ！」

丈二、反応しない。

丈二「どうしても辛くなったらさ、これで元気出せ」

丈二、ポケットからスマホを取り出した。

警官「スナイパー！」

次の瞬間、一発の銃声が響いた。

麗奈「え……？」

麗奈、血を流し倒れる丈二を見て困惑。

丈二「ぁ……」

麗奈、数秒経過し何が起きたか気付いた。

麗奈「お兄さん！」

麗奈、慌てて丈二に駆け寄る。

丈二、右肩から血を流していた。

麗奈、号泣する。

麗奈「お兄さん、死んじゃやだぁ……！」

一同、麗奈の行動に驚く。

麗奈、必死に丈二の傷口を押さえる。

刑事A、近寄った。

刑事A「大丈夫だ、急所は外してる」

麗奈「本当っ？」

刑事A「あぁ、信用してくれ」

救急隊員、丈二に近付き担架に乗せる。

麗奈、心配そうに見ていた。

運ばれる間、麗奈は丈二に着いて行く。

麗奈「ねぇ大丈夫？」

丈二「あぁ、痛ってぇけど……」

丈二、後悔する。

丈二「ごめん、渡せなかった……」

麗奈「良いの、頑張るから！」

丈二、苦しそうに微笑む。

そのまま救急車に乗せられた。

直樹、麗奈の隣に立つ。

直樹「麗奈さん？」

麗奈「はい……？」

直樹「俺、車の持ち主」

麗奈「あぁ……！」

直樹「アイツ良い奴だった？」

麗奈「はい、もちろん」

直樹「よかった」

直樹、そのまま救急車に乗り込む。

扉に手をかけ麗奈に言う。

直樹「待っててやって欲しい」

扉は閉じられ救急車は発車される。

麗奈、地面に丈二のスマホが落ちているのを見つけ拾う。

刑事A、麗奈に声を掛ける。

刑事A「君はこっちだ、一度署で話を聞く」

麗奈「はい……」

麗奈、刑事に着いて行く。

麗奈の両親、刑事の車の前で待っていた。

麗奈父「麗奈……」

麗奈、両親の横を抜け車の後部座席に乗る。

刑事A、エンジンをかける。

麗奈、窓を開けて両親に告げた。

麗奈「帰ったら、ちゃんと話したい」

麗奈父「……」

麗奈「今度は私の話、聞いて」

そのまま車は発車される。

麗奈の両親、寂しそうな目をしていた。

○救急車

直樹、寝ている丈二に話す。

直樹「これから大変だぞ。金もだし、今回の件も」

直樹、救急車の窓から解放されたグループホームの人々を見る。

続いて丈二も見た。

解放された人々の中には震えている者もいる。

丈二「うん。反省して、出てきたらちゃんとするよ」

直樹「金もな」

丈二「もちろん。仕事も探さなきゃ」

直樹、丈二を見て微笑む。

直樹「俺も手伝うからよ、頼ってくれよ」

丈二、目に涙を浮かべてから小さく頷く。

丈二「頼んだ」

○刑事の車

刑事A、麗奈の持つ丈二のスマホに気付く。

刑事A「それ、岬丈二のか？」

麗奈「そうです、これで元気出せって」

麗奈、刑事Bにスマホを手渡す。

刑事B「うわ、血ぃついてる……」

刑事B、スマホを調べる。

開くと音楽アプリの画面が。

刑事A、画面を覗く。

刑事A「聴くか？」

麗奈「……はい」

刑事B、車のBluetoothとスマホを接続する。

そのままプレイリストの上から再生した。

車のスピーカーから麗奈が丈二に最初に聞かされたロックナンバーが流れる。

麗奈、顔を上げる。

そのまま瞳を潤ませ、涙を拭う。

そして微笑み、前を向いた。

○メインタイトル

My Angel

THE END